

## 平成 31 年産の稲作は「稲わらの秋すき込み」からスタート！

- 全面倒伏した稲は早めに刈取り、ゆっくり乾燥させましょう！
- 稲わらを 10 月中旬までにすき込みましょう！
- 籾殻をケイ酸質資材としてほ場に還元しましょう！
- 堆肥や土壌改良資材を活用しましょう！

### 1 全面倒伏や刈り遅れた稲の乾燥・調製

- (1) 全面倒伏した稲は早めに刈り取りましょう。また、籾水分のバラつきが大きくなりやすいので、張り込み後は数時間程度の通風乾燥を行い、その後半日程度貯留して水分ムラを解消してから加熱乾燥を行いましょう。
- (2) 刈り遅れ等で収穫時の籾水分が 20%以下になった場合は、毎時乾燥水分を 0.5%以下に設定して胴割れの発生増加を防ぎましょう。
- (3) 未熟粒や着色粒が多い場合は、1.9 mm のふるい目や色彩選別機の活用で品質向上を図りましょう。
- (4) 墨黒穂病や稲こうじ病が発生した場合は、稲が乾いている状態で収穫し、無発病ほ場の籾とは別に乾燥・調製を行いましょう。

### 2 稲わらの秋すき込み

- (1) 稲わらの秋すき込みは堆肥施用と同等の「土づくり」効果があります。
- (2) 以下の点に注意して、稲わらの秋すき込みを行いましょう。

注意① 春にすき込むと田植え後のワキの発生が増加し、初期生育が抑制されます。



稲わらは秋にすき込みましょう

注意② 秋が深まり気温（≒地温）が低くなると、すき込んだ稲わらは分解しません。



稲わらのすき込みは収穫後できるだけ早く（遅くとも 10 月中旬までに）行いましょう

注意③ すき込み時に深耕すると、下層の稲わらは分解しません。



耕深は 5～10cm の浅うちとし、稲わらと土壌を十分に混和しましょう

### 3 ケイ酸供給源としての籾殻の有効利用

- (1) 多くの水田土壌でケイ酸が不足しており、ケイ酸質資材の施用が必要です。
- (2) 籾殻はケイ酸を約 20%含む有用な**ケイ酸質資材**です。
- (3) 玄米収量 540kg/10a の水田から得られる籾殻（約 130kg/10a）を全てほ場に還元すると、ケイカル 80~100kg/10a 施用と同等の効果が期待でき、土壤物理性（保水性や排水性）も改善します。
- (4) 以下の点に注意して、籾殻を稲わらと一緒に秋にすき込みましょう！

注意① 籾殻を多量に施用するとワキの発生等で稲の生育が抑制されます



施用量は各ほ場から得られた籾殻量を基本とし、均一に散布しましょう

注意②

ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の籾殻

雑草種子が多量に混入した籾殻

翌年の稲の病気や雑草の発生源となるのでほ場には施用しないようにしましょう

### 4 堆肥や土壤改良資材の積極的な施用

- (1) 近年、ケイ酸やリン酸、加里等が減少しているほ場が増加しています。
- (2) 土壤診断に基づき、不足している成分を補う土壤改良資材を施用しましょう。
- (3) 稲わらや堆肥などの有機物の投入は、地力増進や土壤物理性の改善に効果的です。
- (4) チゼルプラウによる粗起こしは、ほ場の排水性を向上させ、稲わらの分解促進や乾土効果による初期生育の向上、春作業の効率化等が期待できます。



チゼルプラウ

玄米の盗難に注意！

倉庫に鍵をかけるなど、盗難対策を徹底しましょう